

(1) 基本的に

応急処置の原則は、「遠くに強く引く」。患部が胴や頭などの体幹部にあるときには「遠く」は手足の甲を使うが、患部が手首・足首から先るときには手足の甲は「遠く」ではないし手足の甲を使っても邪気を引ききれないことが多い。こういうときに「遠く」として使われるのが、左右反対側や上下反対側、それらを組み合わせた対角反対側の対称点。右手首が患部なら、左右対称点は左手首、上下対称点は右足首、対角対称点は左足首。

このうち左右反対側の対称点にツボを探して刺鍼する方法は「巨刺」と呼ばれ古来から有名。残りの上下対称点や対角対称点を使う方法は、文献に出ていることは少ないが、効果的なことが多い。

肘膝のときには、普通に手足の甲に引き鍼することもできるし、巨刺なども使える。巨刺などがとても効果的なのは、手首足首から先。

(2) 巨刺などによる応急処置の手順

まず、どういう動作をしたときに、どの辺りが辛いかを確認。動かすのが辛いときには無理せずに、だいたいの位置を把握する。その後、その患部の左右対称点、上下対称点、対角対称点の近くを探し、対称点の近くの中で一番凹む所を押して圧痛の有無を確認。手首足首から先、特に指のツボは細かいので、鍼柄の頭程の太さの用具で押して探した方が調べやすい。一番圧痛の有る所をツボとして選ぶ。

もし患部が肘膝だったら、対称点のツボに刺鍼する前に、経絡的に関連する手足の甲、つまり、その対称点の延長の手足の甲のツボに引き鍼。

対称点の刺鍼は、軽く刺鍼しながら、患者さんに患部の様子を聞く。患部を余り痛くなく動かせるようなら、辛くない範囲で、ゆっくり色々な方向に動かしてもらい、運動鍼。だんだん動かせる範囲が広がり、動かせる動作の種類が増えていく。

鍼を抜いてから、患部をゆっくり痛くない範囲で動かしてもらい、辛さや痛みが残っている所が無いか確認。残っていたら、残っていた所の対称点の周りを探してツボを見付け、そのツボに刺鍼し、患部を動かせるようなら運動鍼。日常生活に支障が無い程度に改善するまで繰り返す。

後始末は、陰経側にも刺鍼したときには、念のため、先ず、頭の散鍼。陽経側だけの刺鍼のときでも、患部が肘膝の場合には、施術か所の延長上の手足甲の陽経側に引き鍼。患部が手首足首より先の場合にも、施術か所の手足の甲の陽経側を調べてツボが出ていたら引き鍼。

(3) 対角刺→上下刺→巨刺

足首の捻挫が酷くて、患部を動かすと痛がらるときには、対角刺、上下刺、巨刺の順で施術すると上手く行くことが多い。右足首捻挫なら、左手首、右手首、左足首の順で、遠い方から順に、右足首の痛む所の対称点の近くに出ているツボに刺鍼。すると、右足首が調べることは、それほど痛くなく可能な位には改善する。この状態で右足首に残っている圧痛のあるツボに刺鍼すると改善する。

対角刺、上下刺、巨刺の刺鍼中に辛くない範囲で運動鍼をすると、より効果が出やすい。

後始末は、陰経側にも刺鍼したときには、頭の散鍼をしてから、手甲に出ているツボに引き鍼。陽経側だけの刺鍼のときは、右足の甲の陽経側に引き鍼するが、右足首の痛みが残っているときには、左足首の対称点に引き鍼して終えることもある。

(4) 指のツボへの刺鍼での捻鍼法

巨刺などで指のツボを使うときで、ツボが細かく、鍼管を使って弾入すると鍼先がツボから外れてしまう場合には、捻鍼法で刺鍼した方が上手く行く。接触鍼のつもりで施術していると必要なら刺さっていく。

要点

- ① 巨刺は、特に手首足首から先に有効
- ② 巨刺,上下刺,対角刺+運動鍼も効果的
- ③ 重いときは、対角刺→上下刺→巨刺の順で